



論文

令和 7 年 5 月 24 日

黒田 毅

存在という疑問は、物理現実の存在への解明を宇宙の誕生と時間の形成において提示するものである。

存在の確立は必ず空間を要求する。時間の形成は、共有の変化性においてすべての物理現実を求めるものである。

空間の形成は宇宙の誕生と拡大に寄るものである。また空間の形成は、その飽和性において可能であるという仮定は可能である。

これら時間が変化という現実とともに空間が飽和性において存在するという仮定は、宇宙の誕生から、その宇宙の形成における考察を、時間の形成と空間の構築における考察において提案するものである。

これら現実の維持と存在の許容性という基盤に対する考察は、物理現実そのものへの考察を同じく提示できるものである。

空間の形成への考察は、空間という 3 次元性の存在の確立における必要性を理解する必要があるのである。また 4 次元という変化性を有する空間の形成は、その変化を有するのである。

これらはビックバンへの考察を与えるものであり、空間の形成と維持と時間という現実がどのように与えられたのかは、そのビックバンの解明とともに、現実への理解を与える事ができるものである。

これらは明らかにすべての物理現実の基盤であり根本性である。これらは存在それ自体が変化性を求めることを意味するものと考ええる。そしてこれらがビックバンの原理原則として存在するものと考えられるのである。

これらすべての相関性が宇宙に存在することは粒子されなくては行けない。そしてそれがすべての物理現実を与える基盤であることは理解できるものである。



ビックバンがゼロバランスの崩壊と一定数におけるエネルギーの解放と空間の創造であるならば、エネルギー量の一定数と空間の形成がその張力において、安定化するものである。

これらはエネルギーがその振動原理であるという現実とともに、エネルギーの転換における物理形成が現実を与えると仮定できるものである。

これら宇宙の許容性は、ビックバンにおけるエネルギーと熱量の振幅性において存在するものであり、これら許容される物理存在性が物理現象を形成していると仮説できるのである。

これらが振動数における振幅と重力と引力の形成における物理的存在の許容性であり、それら全ては数値において説明できると考えられる。

現実を支える 2 極の存在は、双方がその相関作用において自己の確立を得る。これが振動原理であり、振動の存在はエネルギーの確立である。それらはゼロを支点として拡大する振動の存在であり、空間が張力において存在することがその振動原理の存在を許容する。空間の振動は、エネルギーの存在である。これらエネルギーの存在は 2 極において存在する振動原理であり、宇宙におけるこのエネルギーの総数は、ゼロになる。これらが 2 極における振動の存在と空間の維持の原理である。これらはビックバンにおける宇宙の始まりは、空間を有するものでなく、始原のエネルギー一定数は、今日までその一定数を有するものであると考える。これらが空間の形成を与える原因である。ゼロから拡大するその振動原理は、その振動の永続をその空間形成との相関性バランスにおいて永続できるのである。これらを与えるものが、ひずみ定数 r の存在である。

これらは他方で時間の形成という現実へその理解を提起する。時間は個別物理的变化の永続性であり、変化率の一定性が時間の永続性であるという仮説は可能である。

これらはまた、存在するエネルギー一定数は不変であり、変化の連続性はそのすべてを補足できると考えられる。これら変化は数値化できるものであり、数学における説明はそのすべてに対して可能とあると考えられるのである。

これらは時間が変化率であるならば、これら変化の連続性への理解を求めることができるのである。

これらは振動の許容性が、ゼロから最大まで存在するものであり、その振動数の許容性は、存在性の許容性であると考えられる。



またこれら空間の飽和性が、個別原粒子の存在の確立を可能とする基盤であると考えられるのである。

これらは空間への理解が存在性への理解を可能とするという判断を提示するものであり、空間の飽和性が原粒子の存在を与えるという仮説を提示できるのである。

これらバランスの形成はその存在の許容を与えるものであり、変化においても等しいのである。

これらがゼロという支点への回帰運動であるならば、現実はその中心と共に自己を有すると言えるのである。

これらはエネルギーの圧縮性が現実の全てを形成するという仮説であり、その振動数がゼロから最大まで存在することは、その許容性において現実の形成が存在すると考えられるものである。これらが固化という物理現実の育成であると仮定できるのである。

これらは素粒子運動や原粒子の自転、公転の構築はそれら振動原理との反発作用であり、ひずみ定数 r という現実がすべての物理運動の基盤であると定義できるのである。

これらはインフレーション理論における宇宙の形成に対して、宇宙の始まりの始点というアイディアを求めることで、その説明を与えられるものである。

ゼロバランスの崩壊は、始点からの空間の拡大を与え、インフレーション理論の形成を行うものである。しかしこの0という現実とのバランスが宇宙と空間の維持を与える絶対バランスであると仮定できるのである。

これらは空間の拡大と定数エネルギー量の形成は、ゼロとのバランスにおいてその最大数を得ると考えられるのである。

これら定数の形成はゼロという資源の存在、すなわち神と定義する現実への科学的解明を可能とするものである。

これらがアインシュタイン理論における神の定理への正しい考察であり、宇宙の拡大が光速における経営を与えることや、光という変化数が、時間の形成を与えるという仮説を再度提起するものである。



これらは宇宙の始まりから空間の形成のすべては数値化し、説明できるものであり、これは宇宙のすべての現実を数学において解明できることを意味するものである。またすべての変化を数値において説明することができるということなのである。正しいこれらは10進法を得るのかは疑問であり、原理という課題は数学においてその真理の形成を求めるものである。

$E=mc^2$, $c^2=E/m$, $m=E/c^2$, $c=\sqrt{E/m}$ は、これら宇宙の存在と空間という拡大への統一された理論であると考えられる。空間の拡大と質量の育成は、これら根本原理における存在を説明するものである。

これらは、宇宙の拡大と物理現実の構築が、一定数のエネルギーの拡大において存在するならば、それら宇宙の形成を解明できる定式である。

$1=m=E/c^2$ と仮定するとき、宇宙におけるエネルギー量を仮説できる。これらは宇宙の誕生におけるエネルギー総数を仮説し、その変化における現実は数字と数学において解明できるものである。

また、空間の形成という現実において、エネルギーの定数と張力が、空間の維持を与えるという仮説は、 $E=mc^2$, $c^2=E/m$, $m=E/c^2$, $c=\sqrt{E/m}$ とともに、すべての物理変化を世界が有することへの一つの定説として提案するものである。

これら循環とゼロへの回帰運動は、ゼロという支点からの宇宙の拡大と、ゼロへの回帰運動におけるすべての物理現象の永続的な変化への考察である。